

「医学系（医学）」教育評価報告書

（平成12年度着手 分野別教育評価）

長崎大学大学院医学研究科

平成14年3月

大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成14年度中の着手までを段階的实施（試行）期間としており、今回報告する平成12年度着手分については、以下の3区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（「教育サービス面における社会貢献」）

分野別教育評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

分野別研究評価（「理学系」、「医学系（医学）」）

3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等の設定した目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的な目的及び目標が設定されることを前提とした。

分野別教育評価「医学系（医学）」について

1 評価の対象組織及び内容

このたびの評価は、文部科学省から要請のあった6大学（以下「対象組織」という。）を対象に実施した。

評価は、対象組織の現在の教育活動等の状況について、原則として過去5年間の状況の分析を通じて、次に掲げる6項目の項目別評価により実施した。

- 1) アドミッション・ポリシー（学生受入方針）
- 2) 教育内容面での取組
- 3) 教育方法及び成績評価面での取組
- 4) 教育の達成状況
- 5) 学生に対する支援
- 6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

2 評価のプロセス

対象組織においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を機構に提出した。

機構においては、専門委員会の下に評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査の結果を踏まえ、その結果を専門委員会に取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。

機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった対象組織について、大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

3 本報告書の内容

「対象組織の現況」及び「教育目的及び目標」は、対象組織から提出された自己評価書から転載している。

「評価結果」は、評価項目ごとに、特記すべき点を、「特色ある取組、優れた点」及び「改善を要する点、問題点等」として記述している。

また、「貢献（達成又は機能）の状況（水準）」として、以下の4種類の「水準をわかりやすく示す記述」を用いている。

- ・ 十分に貢献（達成又は機能）している。
- ・ おおむね貢献（達成又は機能）しているが、改善の余地もある。
- ・ ある程度貢献（達成又は機能）しているが、改善の必要がある。
- ・ 貢献しておらず（達成又は整備が不十分であり）、大幅な改善の必要がある。

なお、これらの水準は、当該対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、総合的評価については、各評価項目を通じた事柄や全体を見たときに指摘できる事柄について評価を行うこととしていたが、この評価に該当する事柄が得られなかったため、総合的評価としての記述は行わないこととした。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示したものである。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について、その内容とそれへの対応を示している。

4 本報告書の公表

本報告書は、対象組織及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象組織の現況

長崎大学大学院医学研究科は、長崎県長崎市坂本1丁目12番4号に所在し、昭和30年(1955年)4月1日に設置され、医学部、医学研究科(独立専攻)及び熱帯医学研究所(熱研)から構成されている。

医学研究科の入学定員は70名(平成11年度までは61名)、総定員は262名であり、平成13年5月1日現在の在籍者数は349名である。

専攻は生理系、病理系、社会医学系、内科系、外科系の5つの専攻のほか、平成12年(2000年)度に設置された新興感染症病態制御学系専攻(独立専攻)の計6専攻に分かれている。

生理系専攻は解剖学第一、解剖学第二、生理学第一、生理学第二、生化学、薬理学第一、薬理学第二、放射線生物物理学(原研)、細胞生理学(原研)の9の専攻科目から、病理系専攻は病理学第一、病理学第二、医動物学、病理学(原研)、病態生化学(原研)、寄生虫学(熱研)、微生物病学(熱研)、環境生理学(熱研)、病害動物学(熱研)、熱帯病理学(熱研)、感染生化学(熱研)、比較動物医学、分子免疫遺伝学(熱研)の12の専攻科目から、社会医学系専攻は公衆衛生学、法医学、放射線疫学(原研)、社会環境学(熱研)、熱帯病生態疫学(熱研)、総合診療科学の6つの専攻科目から、内科系専攻は内科学第一、内科学第二、内科学第三、小児科学、皮膚科学、精神神経学、放射線医学、臨床検査医学、内科学(原研)、内科学(熱研)の10の専攻科目から、外科学専攻は外科学第一、外科学第二、整形外科学、産婦人科学、泌尿器科学、耳鼻咽喉科学、眼科学、麻酔学、脳神経外科学、形成外科学、心臓血管外科学の11の専攻科目からなる。

新設の独立専攻新興感染症病態制御学系専攻は、大学院専任教官からなる基幹講座・感染分子病態学と併任教官からなる協力講座・感染分子制御学からなる。感染分子病態学講座の専任教官の現員数は平成13年5月1日現在で12人であるが、職名別に見ると、教授4人、助教授4人、講師2人、助手2人である。これら全教官に任期制を採用している。感染分子病態学講座は感染防御因子解析学、感染分子解析学、病態生理制御学、感染病態制御学の4つの専攻科目を、感染分子制御学講座は生体分子動態学、病態分子疫学、疾患感受性遺伝子解析学、病態因子機能学、細胞修飾機構学の5つの専攻科目を担当する。

独立専攻系設置と平成13年度の医学部講座の大講座制への改組に連動し、教育研究の高度化を目指して大学院部局化を視野にいれた本医学研究科の次なる改革・改組案を現在策定中である。

教育目的及び目標

1. 教育目的

科学性と自立性・社会性をともに身に付けた高度専門職業人としての医師の育成

長崎大学医学部の沿革は、1857年のポンペによる医学伝習所開設に遡り、日本最古の歴史を有する。この間、多くの人材と研究業績を輩出し、日本の医学の発展に多大の貢献を果たしてきた。この伝統を受け継ぎ、科学性と自立性・社会性をともに身に付けた責任感あふれる次世代のリーダーとなるべき高度専門職業人としての医師を育成する。医療の高度化、複雑化、社会化の中で21世紀の高度専門職業人としての医師には、急速な生命科学の進展に対応できる資質が不可欠であり、大学院における先端的教育による創造性（リサーチマインド）の養成が必要である。

科学的独創性と国際性にあふれた多様な医学者の養成

医師の育成に加えて、医学教育には基礎医学研究、先端医療、保健行政、国際医療協力といった多様な分野を担う幅広い人材の育成も社会から要請されている。このような人材の育成には、学部における医師養成のための包括的基盤的医学教育とは一線を画した大学院における高度の専門教育が必要である。近代医学・生命科学の目覚ましい進歩は、医学教育・研究・診療の高度化をもたらしている。この高度化に対応するためには、科学的創造性が不可欠であり、大学院教育研究組織を旧来の硬直した小講座制の枠組みから、より柔軟性のあるものとして再構築し、先端的かつ学際的教育研究を遂行することにより、創造性にあふれた多様な医学者を育成する。長崎は、日本の西端に位置しアジア諸国に面した地理的特性を有し、江戸時代、出島という小さな窓で世界とつながり、取捨選択をしながら西洋の文化、物質を取り入れ、アジアの独自の文化と西欧諸国の文化の共存に取り組んできた歴史がある。この歴史を継承し、国際性にあふれた医学者の養成を目指す。

大学の特長を生かして特定の研究課題を先端的に担い、かつその領域で中心的に社会（世界）に貢献し得る人材の育成

医学研究科には、医学部講座に加えて医学部附属原爆後障害医療研究施設と大学附置研究所である熱帯医学研究所が参画し、特色ある教育・研究が行われてきた。原爆後障害研究施設は、平成9年度改組され、被爆者医療・放射線障害研究のメッカとしての

新たな発展が期待されている。

また、熱帯医学研究所は、全国共同利用研究所・COE (Center of Excellence)として日本の熱帯医学を領導するとともに、途上国における調査研究・保健政策立案と途上国若手研究者の育成を通して国際協力で多大の貢献を果たしている。

更に、社会的要請度の高さと緊急性、長崎大学の地域特殊性と実績、教官の陣容と研究遂行能力などを併せ勘案し、感染症を標的とした独立専攻系（新興感染症病態制御学系）を平成12年度に設置した。長崎大学の個性の象徴であるこの3組織を拠点に、ヒバクシャ医療、熱帯医学、感染症の研究課題を先端的に担い且つその領域で中心的に社会（世界）に貢献しうる人材を育成する。

2. 教育目標

学生受入に関する目標

長崎大学の理念及び学生受入方針の公表・周知
入学定員に対する充足率の向上

多様かつ質の高い学生の受入

- ・多様な入学者選抜方法の導入
- ・優秀な若手医師の受入促進
- ・高度専門職業人を目指す社会人の受入
- ・ヒバクシャ医療、熱帯医学、感染症など本研究科の特徴を理解し、当該分野で将来活躍する意欲を有する学生の受入
- ・熱帯地域の開発途上国及び核汚染等に関連した国の留学生の積極的な受入

提供する教育内容に関する目標（大学院教育の高度化のための共通の教育目標）

教育カリキュラムの改善・改革による教育内容の高度化

- ・自己評価・外部評価に基づく教育内容の改善
- ・基本的医科学知識の修得のための共通科目の充実
- ・最新医科学知識や研究動向の情報受信のためのカリキュラムの改善
- ・中間発表会における研究課題についての基礎知識、研究の成果などの発表能力の育成
- ・シラバスの整備

教官組織の改善・改革による教育研究体制の高度化

- ・自己評価・外部評価に基づく教官組織の再構築
- ・大学院専従教官組織の創設
- ・教員の流動性の確保

研究施設・設備の整備による教育研究の高度化

- ・共同研究施設・設備の整備
- ・科学研究費など外部資金獲得の推進による教育研究環境の充実

教育成果に関する目標

学性と自立性・社会性をともに身に付けた高度専門職業人としての医師の育成のための教育目標

- ・生命医療科学研究者に必要な生命倫理を理解し、それに則した研究を展開する能力を修得させる
- ・基礎医学と臨床医学との有機的連携による教育により、生命医療科学の総合的把握能力を修得させる
- ・高度専門職業人に発展するために必要な先端研究の基本的能力を修得させる
- ・地域における先端医療を展開できる能力を修得させる

科学的独創性と国際性にあふれた多様な医学者の養成のための教育目標

- ・生命科学研究者に必要な問題抽出能力と独創性を育成する
- ・社会医学の知識と方法を修得し、将来保健行政の分野で活躍しうる人材の育成
- ・国際貢献の分野で展開できる基本的能力を修得させる
- ・先端基礎研究者、高度専門職業人の育成を担う教育者になる能力を修得させる

大学の長を生かして特定の研究課題を先端的に担いかつその領域で中心的に社会（世界）に貢献し得る人材の育成のための教育目標

- ・放射線障害医療（ヒバクシャ医療）、熱帯医学、感染症の分野で中心的に社会（世界）に貢献し得る能力を修得させる
- ・当該分野に関連する大学院専従の教育研究組織の創設
- ・熱帯医学の基本知識の修得のためのカリキュラムの整備
- ・新興再興感染症の基本知識の修得のためのカリキュラムの整備
- ・放射線生物学及び放射線障害医療の基本知識の修得のためのカリキュラムの整備

学生支援に関する目標

- ・奨学金制度の活用
- ・ティーチング・アシスタント，リサーチ・アシスタント採用の審査方針の改善
- ・女性学生の研究環境の改善
- ・外国人留学生奨学生運営委員会の設置

評価結果

1. アドミッション・ポリシー（学生受入方針）

ここでは、対象組織における「アドミッション・ポリシー（学生受入方針）」の策定及び周知・公表状況やその方針に沿った「学生受入の方策」の実施状況を評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

学生受入に関する目標に掲げている多様な入学者選抜方法の導入として、年2回の一般選抜、社会人特別選抜及び外国人留学生特別選抜を実施している。特に、入学定員に対する充足率の向上に向けての方策として、(1)大学院の重要性を認識させるため、学部学生に対し、基礎医学教室での実験研究（リサーチ・セミナー）の学部カリキュラムの導入、(2)社会人入学制度（昼夜開講制）の導入、(3)原発事故など放射線障害に関連した地域や熱帯地域途上国等広く世界からの外国人留学生の受入などを実施している。これにより、平成12年度以降も独立専攻設置に伴う定員増にもかかわらず充足率100%を維持している。本選抜方法は、研究科の特色を活かした取組であり、特に原発事故など放射線障害に関連した地域や熱帯地域途上国からの留学生の受入れは、優れた取組である。

高度化に向けた質の高い学生の受入のための方策として、(1)優秀な研究遂行能力を持つ外国人留学生の入学試験科目に英語（質問、解答ともに英語）を平成10年度より導入した。(2)医学部4年次修了成績優秀者の受入制度を平成12年度に導入した。ただし、(2)の制度の適用による入学者はまだ現れていない。

改善を要する点・問題点等

学生受入に関する教育目標に多様かつ質の高い学生の受入として掲げられている5項目を基に、アドミッション・ポリシーを明文化し、学生受入に関する教育目標に掲げているとおり学内外に公表・周知する必要がある。

貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

2. 教育内容面での取組

ここでは、対象組織における「教育課程及び授業の構成」が教育目的及び目標に照らして、十分実現できる内容であるかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

中間発表会は、2年次学生においては、平成10年度より学生各自の研究課題についての基礎知識の発表と学生間での討論、3年次学生においては、平成8年度より研究の進捗状況、成果などの発表と学生間での討論などにより、発表能力の育成を図っている。また、指導教員以外の教員が参加するので、複数の教員による研究のアドバイスも可能になっている。発表能力だけでなく、研究方針などについて多くの助言が得られるとともに、評価ともなる優れた取組である。

大学院セミナーの数の増加（平成12年度は65回開催）と質の向上を図った。例えば、5年前シーボルト生誕200年を記念してオランダ、ドイツから講師を招き、国際シンポジウムを開催（3年に1回開催）するなど積極的に海外から講師を招いて講演会等を行っており、特色ある取組である。

教育研究組織としては、平成12年度に長崎大学独自の独立専攻として新興感染症病態制御学系専攻を創設した。独立専攻系は基礎臨床融合型の大講座からなり、教授を含めた教官全員に任期制を採用した特色ある組織である。

平成13年度に医学部における「小講座制」を廃止して、「大講座制」へと改組し、「基礎・臨床融合型の大講座制」を創設した。その結果、従来の基礎医学と臨床医学の有機的連携がもたらされ、疾患の病因・病態の解明、診断・治療法の開発へ向けた学際的かつ集学的な教育・研究の遂行が可能となる特色ある組織となった。

共通科目は、生命医療科学研究者に必要な生命倫理を理解し、基本的知識を修得させる目的で、医科学概論、現代生命科学特論、熱帯医学概論を開講（平成10年度）、更に平成12年度の大学院独立専攻系の設置に伴い、他学部出身者に対しても基礎医学と臨床医学による総合研究、また、医学を越えた普遍的生命現象などを教授する共通科目（医科学概論、医科学セミナー、医学生物学特論）を拡大した。

改善を要する点・問題点等

シラバスの整備について、平成10年度にシラバスを作成し、平成13年度には、各講座における特論、演習、実習の授業内容を具体的に記載し、シラバスの充実を図っているが、授業内容や方法の記載だけでなく、到達目標や評価の方法等も記載するなど一層の充実が必要である。また、シラバスに沿った授業の展開についての検討も必要である。

貢献の状況（水準）

取組は教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

3. 教育方法及び成績評価面での取組

ここでは、対象組織における「教育方法及び成績評価法」が教育目的及び目標に照らして、適切であり、教育課程及び個々の授業の特性に合致したものであるかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

共通科目に関しては、社会人での教育方法の特例適用学生の便宜を優先して、土曜日、日曜日の両日、あるいは夏期に集中講義として開講し、一般入学履修生にも参加させる方法が取られていることは特色ある取組といえる。

3年次学生の中間発表会においては、指導教員及び他の教員が、各学生の発表に対して採点を行い、その結果をティーチング・アシスタント(教育補助を行う大学院生。以下「TA」とする。)、リサーチ・アシスタント(研究補助を行う大学院生。以下「RA」とする。)採用の資料として活用している点は、適正な採用をする指針として、優れた点である。

学位論文審査において、「共著論文の場合、共著者である教授は審査委員（主査及び副査）になることはできないものとする。」と規定し、実施していることは、公平な審査を行うために適切な取組である。これは、平成10年に行った外部評価において指摘された点であり、迅速な改善に向けての対応も評価できる。

改善を要する点・問題点等

共通科目の成績評価法に関しては、毎回、出欠を確認することによって合否判定を行い、専門科目に関しては、各授業担当教員に任せている。研究科として適切な評価方法を検討し、指し示す必要がある。

貢献の状況（水準）

取組は教育目的・目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

4. 教育の達成状況

ここでは、対象組織における「学生が身につけた学力や育成された資質・能力の状況」や「修了後の進路の状況」などから判断して、教育目的及び目標において意図する教育の成果がどの程度達成されているかについて評価し、特記すべき点を「優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成の程度を「達成の状況（水準）」として示している。

優れた点

博士課程論文の質が向上し、学位論文のほぼ100%が英文論文となり、かつ、その多くがScience Citation Index (SCI)にリストされている国際誌に掲載されている。これについては、学生からの要望もあり、質の向上について教官だけでなく学生も改善に務めており、特に優れた点である。また、発表した論文については、毎年刊行している医学部業績集に掲載し、SCIにリストされている国際誌に掲載された論文については、スターマークを付け判るようにしている。

改善を要する点・問題点等

授業科目の単位を修得したものの、学位論文が完成せずに未修了の学生が多い。(平成9年度入学、平成13年度修了予定者のうち、約40%)これについては、指導教官が4年で学位を取らせることに対して意識が乏しいことも原因の1つであり、研究科全体でこのことに対して改善に向けて取組む必要がある。ただし、その後5年間で学位をほぼ100%取得している。

達成の状況（水準）

教育目的・目標の達成にある程度貢献しているが、改善の必要がある。

5. 学生に対する支援

ここでは、対象組織における「学習や生活に関する環境」や「相談体制」の整備状況や「学生に対する支援」が適切に行われているかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

経済的支援として、平成12年3月現在、大学院学生数282名中、奨学生数は43名で、大学院学生の15%が奨学金を受けている。外国人留学生への奨学金に関しては、平成12年度の外国人留学生49名中、25名が国費留学生である。学資に困窮している私費留学生に対し、同窓会からの支援を受けて毎年1名に奨学金を支給している。この奨学金の運営に関し、必要事項を審議するため学部私費外国人留学生奨学生運営委員会を置き、私費留学生に学費、生活費及び宿舍費を補助しており、特色ある取組である。

TA, RAの制度を活用するにあたって、可能な限りの公平さをもって採用するために、3年次学生の間接発表会での評価に基づいて採用している点は、特に優れた方法である。

改善を要する点・問題点等

学生の相談体制について、全学的な組織として、学生なんでも相談室が設置されていたり、指導教官として学生の教育研究や個人的な生活の支援を行っているが、研究科として、心理的な問題、学習上あるいは経済上の問題を相談するシステム（体制）が組織されていない。特に、指導教官と学生の問題が生じた時にこれを調整する体制を整備するなど改善する必要がある。

貢献の状況（水準）

取組は教育目的・目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

ここでは、対象組織における教育活動等について、それらの状況や問題点を組織自身が把握するための「教育の質の向上及び改善のためのシステム」が整備され機能しているかについて評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

平成10年に外部評価を実施し、そこで指摘された研究科に関する事項「大学院の充足率の向上」、「教官任期制の導入」を迅速な検討により、改善し、実施している点は特に優れている。

教員の教育活動を評価する体制として、長崎大学全体で評価体制を組織し、教員個人の教育、学術・研究等について5年毎の数値評価を行う体制が整備され、その評価結果を、学部長、学長の責任のもと、個人の特定につながるデータ以外は、できる限り公表し、寄せられる意見等を積極的に教員の活性化につなげることとしたことは、特色ある取組である。実際の評価は14年度から実施する。

大学院専従の教育研究組織の独立専攻として創設した新興感染症病態制御学専攻では、教員の任期制を導入し、教育研究に対する評価を基に再任の判定を行っている。

改善を要する点・問題点等

教育の質の向上・改善システムについて、各授業の改善は担当教官に任されており、研究科全体として教育の改善に結び付けるシステムがまだ十分に整備されてない。実状にあった教育改善を行うためのシステムを組織的に整備していく必要がある。

機能の状況（水準）

向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。

評価結果の概要

1. 項目別評価の概要

この概要は、項目別評価結果の記述内容を要約したものであり、「特色ある取組・優れた点」、「改善を要する点・問題点等」及び「貢献(達成,機能)の状況(水準)」で示している。

1) アドミッション・ポリシー(学生受入方針)

特色ある取組・優れた点

多様な入学者選抜方法の導入など入学定員の充足率向上のための方策を実施し、100%を維持している。原発事故など放射線障害に関連した地域や熱帯地域途上国からの留学生を受け入れている。

改善を要する点・問題点等

アドミッション・ポリシーを明文化し、学内外に公表・周知する必要がある。

貢献の状況(水準)

取組は教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

2) 教育内容面での取組

特色ある取組・優れた点

研究の進捗状況、成果の発表などを行うため2年次、3年次に中間発表会を実施している。大学院セミナーの数の増加と質の向上を図った。平成12年度に独立専攻として新興感染症病態制御学系専攻を創設した。

平成13年度に医学部における「小講座制」を廃止し、「大講座制」へと改組した。

改善を要する点・問題点等

到達目標や評価の方法等の記載など一層の充実とシラバスに沿った授業の展開。

貢献の状況(水準)

取組は教育目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

3) 教育方法及び成績評価面での取組

特色ある取組・優れた点

共通科目に関して、社会人学生の便宜を優先して土曜日、日曜日や夏期に開講している。

3年次の中間発表会における採点結果をTA, RA採用の資料として活用している。

改善を要する点・問題点等

共通科目の成績評価法に関して、研究科として適切な評価方法を検討する。

貢献の状況(水準)

取組は教育目的・目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

4) 教育の達成状況

優れた点

博士課程論文の質が向上し、学位論文のほぼ

100%が英文論文となり、その多くが国際誌に掲載されている。

改善を要する点・問題点等

授業科目の単位を修得したものの、学位論文が完成せずに未修了の学生が多い。

達成の状況(水準)

教育目的・目標の達成にある程度貢献しているが、改善の必要がある。

5) 学生に対する支援

特色ある取組・優れた点

私費留学生に対し、同窓会からの支援を受けて毎年1名に奨学金を支給している。

TA, RAを公平に採用するため、3年次学生の中間発表会での評価に基に採用している。

改善を要する点・問題点等

研究科として、心理的な問題などを相談するシステム(体制)が組織されていない。

貢献の状況(水準)

取組は教育目的・目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

特色ある取組・優れた点

外部評価で指摘された研究科に関する事項を改善し、実施している。

大学全体で評価体制を組織し、教員個人の教育などを5年毎の評価を行う体制が整備された。

改善を要する点・問題点等

研究科全体として教育の改善に結び付けるシステムがまだ十分に整備されていない。

機能の状況(水準)

向上及び改善のためのシステムがおおむね機能しているが、改善の余地もある。